

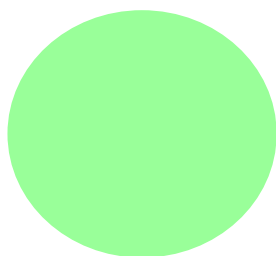
この感想文集は
連合静岡のホームページからも⇒
ご覧いただけます



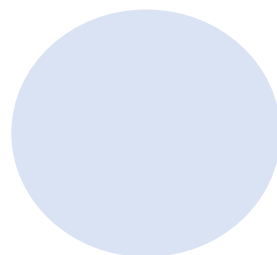
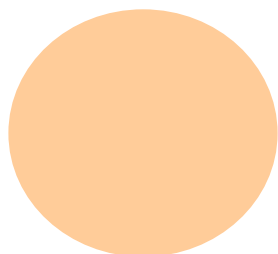
連合静岡

2025 平和行動

感想文集



戦後80年。語り繋ごう、「平和」を。



連合静岡



— もくじ —

P.03～P.16

沖縄行動

P.17～P.30

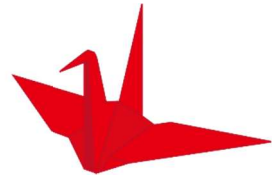
広島行動

P.31～P.45

長崎行動

P.46～P.57

根室行動



今年は戦後ちょうど80年の節目の年です。連合は世界の恒久平和の実現に向けて、より一層平和運動に力を注いでいます。ところが、戦争の悲惨さを実体験として語り、平和の尊さを伝える「語り部」がすでに80歳代後半～90歳を超え、その体験を直接次世代に語り継ぐことが難しくなっています。

連合静岡は今年も平和4行動へ51名の団員を送り、直接現地を訪問することでしか気づくことができない戦争の悲惨さや平和の尊さを肌で感じてきました。

また今年も、広島・長崎では、連合静岡独自の活動として、被爆者による「語り部講話」を実施し、「次代へ語りつぐ」ことに重点をおきました。

これらの活動を通して団員一人ひとりが様々な実体験とともに、「今」を生きる私たちがすべきことは何かを考えるきっかけになったはずです。

今もなお世界の各地で尊い命が奪われる惨劇が繰り返されています。連合静岡はこれからも世界の恒久平和を祈り、そして戦争を二度と繰り返してはならないことを語り継いでまいります。



※広島・長崎に持参し献納した折り鶴は、今回も地協のみなさんが心から恒久平和を祈って折っていただいたものです。「平和の取組み」での「平和メッセージ」とともに、団員がみんなの想いを届けてまいりました。

平和行動 in 沖縄

日程：2025年6月22日（日）～25日（水）

6月23日は、1974年に制定された沖縄県の条例により、戦没者の霊を慰めるための「慰霊の日」と定められています。太平洋戦争で日本唯一の地上戦が行われた沖縄戦。その痛ましい傷跡を目の当たりにした団員は、戦争による惨禍が再び起こることのないよう、人類普遍の願いである恒久平和を願い、祈りを捧げてまいりました。



平和行動 in 沖縄に参加して

アブチラガマとひめゆり資料館を訪れることで、沖縄戦の悲惨さと平和の尊さを深く実感しました。

アブチラガマは、戦時中の地下壕跡であり、多くの兵士や民間人が命を落とした場所です。狭く暗い空間の中で、戦争の恐怖と絶望を想像し、平和の尊さを痛感しました。

一方、ひめゆり資料館は、沖縄戦で犠牲になった少女たちの資料や遺品を通じて、戦争の悲惨さと若い命の尊さを伝えています。特に、資料館の展示を見て、戦争の悲劇が二度と繰り返されてはならないと強く感じました。

これらの場所を訪れることで、戦争の現実と平和の大切さを改めて認識し、未来に向けて平和を守る決意を新たにしました。戦争の悲劇を忘れず、次世代に伝えることの重要性を痛感しました。

団員の皆様にも、お支え頂き感謝いたします。



教育が人を変える

2025平和行動 in 沖縄に参加をさせていただき、自分自身の沖縄戦に対する知識や理解の薄さを痛感しました。米軍基地や日米地位協定の問題等、ニュースで見聞きすることはありますが、現地のガイドの方々から説明を受けたり、史跡を実際に見たりすることを通して、決して忘れてはいけない沖縄戦の歴史があるということを知ることができました。

特に印象に残ったところは、系数アブチラガマです。系数アブチラガマは、住民の避難場所、陣地として利用されましたが、後に南風原陸軍病院の分室として使用されました。その際に動員されたひめゆり学徒の話は有名ですが、壕の中には当時の爪痕が今もしっかりと残されており、当時の様子を思い浮かべるために懐中電灯を消したときには、悲惨な戦争下を必死に生きた沖縄の方々の思いが自分の心の中に入ってくるような感じがしました。その時、現地ガイドの方の話した「教育が人を変えるんです。」という言葉が今も忘れられません。当時の軍国主義の教えは、御国のために簡単に命を捨てる人をつくりあげ、多数の住民犠牲者を出した歴史を生んでしまいました。教育の仕事に従事する自分自身が現在の子どもたちに何を教えなければいけないか、改めて教えてくれた気がしました。

配付された資料の冒頭に、「記憶は知性を育み、忘却は暴力を生む」と書かれています。沖縄戦の真実を知り、それを忘れずに正しく語り継ぐこと、恒久の平和に向けて行動することが何よりも重要だと思います。今回の平和行動を通して感じたことを、これからの自分自身の生活、そして組織としての活動等につなげ、真の平和に向けて取り組んでいきたいと思っています。



教育の大切さを学ぶ



戦後 80 周年を記念するこの年に「平和行動 in 沖縄」に参加させて頂きました。

沖縄戦は、95000 人弱の方がお亡くなりになり、民間の方が半数以上となりました。

日本軍は沖縄を本土防衛の防波堤と位置づけ、本土上陸を 1 日でも遅らせる為に長期戦に持ち込む持久作戦をとりました。尊い命を落とされた皆様に対し、心より哀悼の意を表すると共に、安らかにご永眠されます

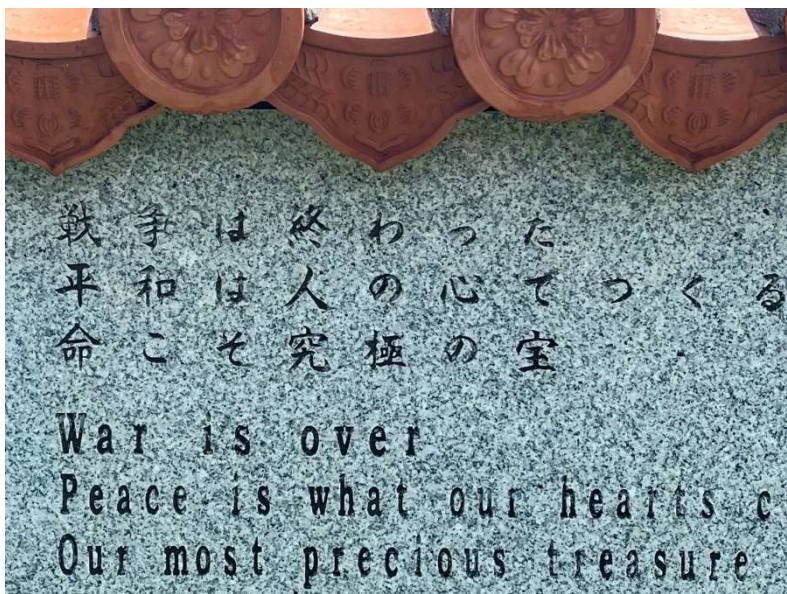
こと心よりお祈り申し上げます。

数にするとわかりづらいですが、そのおひとりおひとりにご家族がおり、恋人があり様々な思いがあったと思います。

系数壕を見学させて頂いた際、子供が書いた文章に「投降すればよかったのに」と記載がありました。素直な意見だなと思いましたが、当時の日本の教育が「生きて敵の捕虜になるのは恥だ」「捕虜になれば、男は戦車でひき殺され、女は辱めを受けて殺される」と米軍への恐怖心が植え付けられ、子供たちは将来、兵士として戦う訓練をし、身近なところから戦争に関係するものを登場させて戦争になれさせ戦争に勝つことを子供に教えていました。

現在の日本人では「国のために戦いますか?」という問いに対し、日本人は世界最低の回答率です。今の平和な日本では、考えられません。

改めて、教育の大切さを考えさせられました。



今ある平和が当たり前ではありません。尊い犠牲の上に成り立っている。その事を忘れては、いけない。風化させてはいけない。そのために何ができるのか?を考えさせられる貴重な体験となりました。

最後に、堀田団長をはじめとして甲田さん、添乗員の鈴木さん、共に行動して下さった各労組の皆さま4日間ありがとうございました。

「命どう宝」に触れて沖縄で考えた平和と歴史

これまで沖縄には旅行で訪れたことがあり、美しい海や森の風景に心癒されてきました。しかし、今回の体験はそれまでの印象を大きく覆すもので、沖縄の風景の裏にある戦争の歴史に深く心を揺さぶられました。

アブラチラガマでは、語り部の方が語ってくださった壮絶な出来事に胸が締めつけられ、ピースフィールドワークでの説明や資料館の展示では、目を背けたくなるような事実衝撃を受けました。

沖縄が抱える歴史と、戦後 80 年を迎えた今もなお続く重い課題を肌で感じる中で、言葉にならない思いが込み上げました。平和オキナワ集会での平和アピールの中にあった「命どう宝」という言葉が胸に深く刺さり、心が震えました。改めて、戦争とは何か、命とは何か、そして平和とは何かを考えさせられる貴重な体験となりました。堀田団長、ユニオントラベルの鈴木さん、そして参加されたみなさんと行動を共にできたことに、心から感謝いたします。



80年目の平和のバトンを受け取って

私は6月23日、慰霊の日に沖縄で行われた平和行動に初めて参加しました。沖縄戦の犠牲者を追悼し戦争の愚かさとして私にとって当たり前になっていた平和の尊さを改めて考える日となりました。現地で多くの慰霊碑と資料館を訪れ当時の出来事を学び、もし今だったら・・・と自分の子供たちやすれ違う子供たちが戦争に駆り出される姿を想うと胸が締め付けられました。



2025年は終戦から80年が経っています。私はこれまで戦争は遠い昔の出来事だと思っていました。しかし『ひめゆり学徒隊』の事を知りその考えが大きく変わりました。

15～19歳の少女達が看護の為に戦場に駆り出され常に死との隣り合わせ。想像を絶する極限状態の中で人としての感情を失っていく様子。戦争末期には戦火の中での無責任な解散命令により多くの命が失われたこと。どれをとっても信じられませんが事実でした。

80年は昔の話ではない。今も同じような戦争が世界で起きている。今この瞬間にも同じような惨劇が起きている事実を目を背けているだけだと気づかされました。

私には何ができるだろうか。それは今この平和のありがたさを忘れず学んだことを誰かに伝え続けていくこと。それが私の平和への行動だと感じています



2025 連合平和行動 in 沖縄

戦後80年の節目に沖縄県を代表する戦争遺産を始めて見学させて頂きました。

6/23『沖縄_慰霊の日:アブチラガマ』の中で、ガイドさんの号令により全員が手元の懐中電灯を消した時、本・映像とは全く違う、戦争の悲惨さ(質量・感覚・冷たさ・恐怖)を全身で感じました。

6/24『ひめゆり平和祈念資料館』に『宮沢和史さん』の献花がありました。代表作『島唄』は、沖縄戦を意味している悲しい曲です。

以下菓子抜粋,「ウージの森であなたと出会うージの下で千代にさよなら・・・」は,「サトウキビ畑であなたと出会う。サトウキビ畑の下(ガマ)で永遠の別れ(自決)」という意味。少なくとも自分が安心・安全な環境で生活できていることは,決して当たり前ではない。

これから戦争遺産が歴史の闇に消えずに,

いつかまた沖縄に来る時も変わらずにありますように・・・。

※「このまま永遠に夕風を・・・」=永遠の平和を祈っております。

【お礼】堀田団長,ユニオントラベルの鈴木様,各地協役員の皆様,
大変貴重な機会を与えてくださり,ありがとうございました。



2025 平和行動 in 沖縄

今回の平和行動で沖縄の地に初めて降り立ち、率直に感じたのは空が近くて青いというのが第一印象でした。

戦場となった場所を色々と巡り写真や映像で又は手記で凄惨な光景を目にして考えさせられる事がありましたが、私達のそばには真っ青な空と豊かな自然がすぐそこにありました。目の前にある当たり前の物を壊してしまう戦争を二度と起こしてはならない、そして平和の尊さを肌で感じた気がします。しかし、空には米軍のオスプレイが飛んでいる光景もあり、沖縄のそこかしこに敗戦国としての様相が色濃く残っているのも事実でした。

資料館にあった小学生の感想文に、「戦争はえらい人が勝手に始めて、勝手に死んでいった。おかしいと思う。二度とおきてほしくない。」という文章がありました。このえらい人というのは誰を指すのか、再び平和の道を違える事がないよう願うばかりです。

今回、特に印象に残った言葉があります。《戦争を憎み、人を憎まず。》平和記念公園には国籍問わず、沖縄戦で犠牲となった方の名が慰霊碑に刻まれています。現代もなお、世界では戦禍に見舞われている国があり、悲惨なニュースを目にしています。大事な人を守る為にも過去を振り返り、お互いが寄り添っていく世界が広がっていけばと心に強く思います。



2025 平和行動 in 沖縄

今回の平和行動を通して、私は戦争の悲惨さと平和の尊さを、心の底から実感することができました。

最初に訪れた系数アブチラガマでは、重症患者が担ぎ込まれた場所や麦米を詰めていた瓶などの遺留品、爆発による戦禍の跡を目の当たりにしました。ガイドさんから「この場所では、日本兵が住民に銃を向け、ガマから出られないように見張っていた」など、状況を具体的に思い描けるお話を聞き、まるで自分が当時の悲惨な現場にいるかのような錯覚を覚えるほど、強い戦慄を感じました。

ピースフィールドウォークで訪れたひめゆりの塔では、学生生活を楽しそうに過ごしていた生徒たちが、戦争によって学徒隊として動員され、看護活動に従事した経緯を知ることができました。看護活動だけでなく、銃弾が飛び交う中での水汲みや、汚物・死体の処理など、想像を絶する過酷な状況に置かれていたことを証言ビデオや記録から知り、胸が締め付けられました。

現地を訪れることによって、楽しく希望をもって過ごしていた日常が一変してしまう戦争は、二度と起こしてはならない、今の平和な日常をこれからも過ごしたいという思いを改めて強くしました。そして、この体験を自分の中だけに留めるのではなく、仲間や周囲の人々にも伝えていく責任があると感じています。

最後に、堀田団長を始めとして、参加者の方々と、このような貴重な体験を共有し、語り合うことができたこと、またこのような機会を設けていただいた連合静岡と静岡地協に感謝申し上げます。



2025 平和行動 in 沖縄

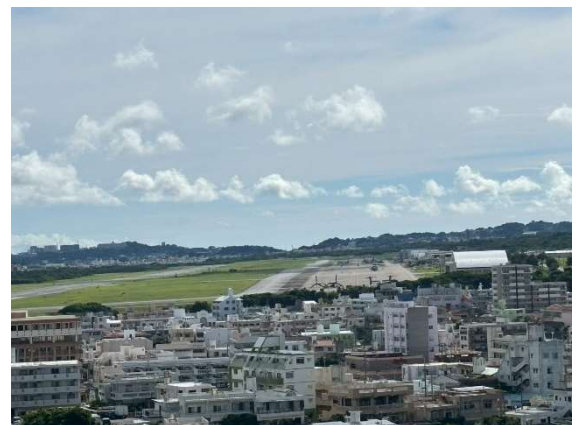
今回はじめて連合平和行動に参加させていただきました。戦争については、これまでに浅い知識しかなく広島・長崎の原爆投下についてなどの印象は強かったものの、唯一の地上戦が沖縄だったことなど全く無知でした。



二日目にアブチラガマを見学させていただき、ガイドさんに当時の状況を詳しく説明して頂きながら回らせていただいたのですが、今では考えられない当時の状況や衛生面、そして若い学生までもがその場で奴隷のように扱われていたことを知り胸が痛くなりました。またそれと同時に私たちの現状の豊かな教育環境があるのは、当時苦しんだ辛かった方々のおかげであるとも感じました。何十万人

もの方々がお亡くなりになられた中で、ガイドさんより『死んだのは人数ではない！死んだのは人だ！』というお話があり、漠然と〇〇万人が無くなったという話や教科書を見たりはしたが、その一人一人に家族がいてそしてその人の人生があったのだと思うと本当に考えさせられる時間となりました。

三日目はピースフィールドワークで色々な場所を見学させていただきましたが、まず高台から見た普天間基地は、こんなにも住宅街に隣接しているのかと驚いたのと、共にそこで生活している方々の恐怖心を知りました。そしていまだ解決していない問題等があることも知り、住民の不安や声はニュース等でも拝見したことがあったが自分の目で実際の状況を見ることで思っていた数倍の衝撃を感じました。



ひめゆりの見学（資料館等）では、当時の学徒生の状況や亡くなられた方、一人一人のお写真と人柄が記されたものがあり、胸が痛みすべてに目を通すことができませんでした。出口付近にも見学された方のアンケートが貼られていましたが、子供が書いたアンケートが率直かつ的確で平和について考えさせられるものでした。

平和記念公園など様々なところを見学させていただき、私の知っていると思っていた戦争への認識や知識はとても浅はかなものだったと思い知らされました。

この経験を私だけに留めることなく、地協メンバーや組合員へも伝えていきたいと思います。

「2025 連合平和行動 in 沖縄」に参加して

今回は、「2025年連合平和行動 in 沖縄」に参加する機会をいただきありがとうございました。戦後80年という節目の年にあらためて戦争の悲惨さや平和の大切さについて学ぶ機会となりました。教科書でしか知らない太平洋戦争でしたが、実際に現地に行くことで現地でしか感じるこのできない学びがありました。

連合静岡独自活動として訪れた「系数アブチラガマ」は、日本軍の軍医、看護婦、ひめゆり学徒隊が配属された自然の洞窟です。実際に中へ入り照明を消し真っ暗闇の中で伝い落ちる水の音だけが響き渡る状況を体感しましたが、その過酷さと悲惨さに胸が張り裂けそうな思いでした。午後に行われた「平和オキナワ平和集会」では、「あらたな安全保障を目指して!」という基調講演や平和式典を通じて、80年経った今もなお戦後の重い現実を背負い続けていることを知りました。



連合全体での「ピースフィールドワーク」では、嘉数高台から普天間基地を見下ろしオスプレイが配備されている状況を確認できました。基地は民家や学校と隣接しており、オスプレイの飛行音はとて大きく怖さを感じました。

旧海軍司令部壕、ひめゆりの塔、平和記念公園、魂魄の塔などを見学しましたが、教科書では学ぶことのない当時の状況は言葉では言い表せないほど凄絶であったことを知りました。

日本軍による虐殺、集団死・集団自決に追い込まれた住民が多くいるという事実。これは想像を絶する真実であり、どれほど理不尽で残酷な出来事だったのかを考えると、言葉を失いました。「ピースフィールドワーク」の後には1,000人超の参加者でデモ行進を行いました。

今回の平和行動は、戦争の歴史・事実を学ぶことのできた貴重な体験となりました。学校では学ぶことのできない沖縄戦については、現地に行かなければ知ることのできない、感じるこのできないものです。是非、一人でも多くの方に参加していただきたいと思います。

戦後80年の節目の年に貴重な経験をさせていただき感謝申し上げます。

「2025 年連合平和行動 in 沖縄」に参加して

このたび、「2025年連合平和行動 in 沖縄」に参加する機会をいただき、戦争の歴史や平和の大切さについて深く学ぶことができました。実際に現地に足を運び、自分の目で見て、肌で感じることで、教科書や講義だけでは得られない学びがありました。

6/23(月)は「アブチラガマ」を訪れました。ここは戦時中に避難や医療の場として使われていた自然の洞窟です。実際に中へ入ると、想像以上に暗く、狭く、湿った空間が広がっていました。ここで多くの負傷者や看病をしていた方々が日々を過ごしていたと考えると、その過酷さと悲惨さが胸に迫ってきました。特に、ガマの中で電気を消したときの真っ暗闇は、当時の状況を少しでも体感できたような気がし、心に深く残りました。

その後に行われた平和集会では、安全保障についての講演を聴くことができ、現代の課題についても考えるきっかけとなりました。平和とは過去の反省の上に成り立つものであることを改めて認識しました。

6/24(火)のピースフィールドワークでは、嘉数高台から普天間基地を見下ろし、旧海軍司令部壕、ひめゆりの塔、平和記念公園、魂魄の塔などを巡りました。どの場所にも、言葉では言い表せないほどの凄絶な歴史が刻まれており、心が締めつけられる思いでした。

特に印象深かったのは、ひめゆり学徒の悲劇です。招集された学徒たちは、解散命令によって戦火の中へ放り出され、多くの命が奪われたという事実を初めて知りました。これは想像を絶する現実であり、どれほど理不尽で残酷な出来事であったかを考えると、言葉を失いました。

今回の体験は、戦争の歴史を学ぶと同時に、沖縄の文化や食に触れる機会もあり、大変充実した時間となりました。このような貴重な体験ができたことに深く感謝しています。

平和の尊さを次の世代に伝えていくためにも、より多くの方が実際に現地を訪れ、自分の目で見て感じる事が大切だと実感しました。現地を訪れることで、学校などで学んだ知識がより立体的に、自分ごととして理解できるようになると強く感じました。今後もこの学びを大切に、平和について考え続けていきたいと思います。



2025 連合平和行動 in 沖縄に参加して

6/22～25、連合平和行動in沖縄に参加し4日間の活動をしました。

2日目には「アブチラガマ」と「首里城公園」の見学、午後は「2025 平和オキナワ集会」への参加、3日目にはピースフィールドワークで「嘉数高台」「ひめゆり平和祈念資料館」や「平和祈念公園」等の数々の戦跡を見学した後、「米軍基地整理・縮小と日米地位協定の抜本見直しを求める集会とデモ行進」に参加しました。

太平洋戦争時には沖縄で激しい地上戦があったことやひめゆり学徒隊の話は学生時代の教科書にも載っていたことで知識としてはもちろん知っていましたが、今回様々な戦跡を自分の目で見て、お話を聞き、多くの証言映像や当時の写真に触れて、今までの知識などから感じていたものを遥かに超えた凄惨さであり、知るにつれて胸が苦しくなるほどの衝撃を受けました。当時の教育から当たり前のように国のために戦い命を捧げた方々の無念、壮絶な戦争を生き抜き目の前で大切な人を亡くした悲しみを抱えながら戦後を生きた方々の思いは想像を絶するものがあり、これまで持っていた沖縄に対するイメージさえも少し変わりました。

今の平和な日本は多くの犠牲と悲しみを経てできていることを忘れてはならず、現代を生きる私たちにできることは、目を背けることなくしっかりと戦史と向き合い、戦争というものの現実を正しく認識することと平和の大切を今回得た感情とともに周りに、そして後世に伝えていくことだと思います。

米軍基地問題も日米地位協定のこと、同じ日本でありながら本土の人にとってはどこか他人事を感じている人がほとんどだと思います。実際これまでの私もそうでした。これらも含め、今回しっかりと“未来の平和”というものを自分事として捉え考える時間となりました。平和は当たり前に誰かから提供されるものではなく、みんなで努力して作り上げていくものであり、自



分もその一員として積極的に行動していかなければいけないと改めて強く感じ、何ができるか考えさせられる良い機会となりました。

最後に、現地でのピースフィールドワークで素晴らしい説明をしてくださった連合沖縄の皆さん、連合静岡の団員の方々には大変お世話になりました。ありがとうございました。堀田団長をはじめ普段接することの少ない中部以東の地協の方々と良い交流ができ、親睦を深めることができました。学ぶ時は真剣に学ぶ、楽しむ時も思いきり楽しむ、というメリハリの利いた活動ができる素敵な団でした。このような機会を与えてくださった連合静岡に感謝いたします。



平和行動 in 広島

日程：2025年8月5日（火）～7日（木）

人類史上初めて原爆が投下された広島。その核の悲惨さを誰もが知っているはずなのに、世界ではいまだ「核の抑止力」の名のことで核保有国が存在しています。悲劇が二度と繰り返されないよう、そして核なき世界を目指して、人類普遍の願いである恒久平和の実現のため祈りを捧げてきました。今もなお各地で戦争や紛争が起こっているこの世界で唯一の被爆国である日本は、80年間戦争せずに平和を訴えてきました。連合静岡は世界平和の重要性を伝え続けます。



“二度と過ちを繰り返さない”
—80年目の誓い—

太平洋戦争終戦から80年という節目の年に、連合静岡の広島平和行動の団長という重責を担い、再び8月6日の広島を訪れ、“二度と過ちを繰り返さない”と誓う世界中の人々の姿に出会うことができました。

私は、2006年度から述べ8年間、日本教職員組合の中央執行委員を務め、広島県では2008年度に教育研究全国集会を開催させていただき、現地実行委員会である広島県教組・高教組との打合せやマスコミ対応等で幾度となく広島を訪れました。当時は会議等が中心だったので、原爆ドームや平和記念資料館を見学するくらいしかできませんでした。が、たった数十年前に“この地”が焦土と化したことは想像できないほどの“復興”に驚いたことを覚えています。

今回、私たちは8月5日に広島に入りましたが、その2日前から広島電鉄の路面電車が広島駅に乗り入れるようになったとのことで、駅構内の雰囲気も以前とはガラリと変わっていました。ただ、どれだけ街の様子が変化しても『8月6日のヒロシマ』には、目に入るものすべてを数十年前の“あの日”に戻す力があるように感じます。私は、そんな思いで3日間を過ごしていました。

5日に開催された連合平和集会では、連合静岡各地域協議会の仲間たちの祈りを込めた折り鶴を献納させていただきました。広島に投下された原爆によって犠牲となった多くの御霊に哀悼の誠を捧げると共に、ロシア、中東、北朝鮮など“核兵器使用の脅威”が現実味を帯びる中、この折り鶴に込められた思いが、世界中の為政者たちに伝わることを強く願いました。

6日の平和記念式典は、平和記念公園内にある『原爆の子の像』の前から祈りを捧げました。像のモデルである佐々木禎子さんについては、教員時代、小学校の道徳の題材とされており、平和について考える貴重な時間となっていました。戦争では多くの罪なき人々が犠牲となりましたが、とりわけ、子どもたちの未来が奪われたことは、心をかきむしられるような思いを抱きます。私を含め、禎子さんの無念や怒りに共感することは叶いませんが、せめてその思いに寄り添うことができればと思いながら授業をしていました。禎子さんの像が見つめる前で黙祷を捧げながら、(教え子たちは今、戦争や平和についてどのように考えているだろうか?)と考えていました。



2025 平和行動 in 広島に参加して

連合静岡主催の平和行動に初めて参加させていただきました。



初日 8 月 5 日は結団式の後、被爆路面電車乗車学習会に参加しました。原爆投下により甚大な被害を受けた広島電鉄の車両のうち、今日においても営業車両として運用されている2両のうちの1両に乗車する貴重な機会を得ました。乗車中、連合広島の方々から、猿猴橋付近で、水を求めて亡くなられた多くの方の遺体で川面が埋め尽くされたというお話や、避難された多くの方々が比治山の火災により亡くなったというお話、宇品港では軍港として多くの若者たちを戦地に送り出し、若者たちは生きては帰らぬ覚悟で戦地に向かったというお話を聞き、戦争は二度と繰り返してはならないという思いを強くしました。

連合2025平和広島集会では、被爆体験証言として切明千枝子さんの被爆体験を拝聴しました。「思い出すのも話すのもつらく苦しい」というお言葉からは、80年を経てもなお戦争による心の傷が深く刻まれていると感じました

翌8月6日は広島市平和記念公園にて平和祈念式に参加し、午後には平和記念資料館を訪れました。インバウンドの訪日旅行者の増加に伴い、2年前に訪れた時よりも外国人の方が明らかに増えていました。海外の方も真剣に展示に見入っているのが印象的でした。

その後訪れた被爆遺構展示館では、被爆当時の民家と道路の跡が残されていました。遺構は、人々が普通に生活していた場所が原爆により無残に破壊された状況を生々しく残しており、前日に聞いた切明千枝子さんの「現在の広島は、原爆被害者のお骨の上に作られている」という言葉が実感を持って思い出されました。



翌8月7日は、平和学習会ということで被爆を語り継ぐ会の岡本忠さんの被爆体験を聞きました。岡本さんは1歳5か月で被爆したということで、原爆投下後の被爆者家族の苦しい生活や貧困、原爆症への不安などについてお話してください

ました。岡本さんのお話を伺い、被爆者の苦しみは今もなお続いていると感じました。

三日間の平和行動を通じて、原爆とその被害者の「実相」を知ることが、いかに大切かを痛切に感じました。そして、戦後80年が経ち「語り部」の高齢化が進む中、どうしたら戦争体験を風化させることなく引き継いでいくことができるだろうか、と考えさせられる三日間でした。



平和行動に参加し、私は「核と人類は共存できない」という思いを一層強くしました。労働組合にできることは限られていると思いますが、高校生平和大使の掲げる「微力だけど無力じゃない。」を胸に、単組においても平和に対する取り組みに力を尽くしたいと思います。

最後になりますが、貴重な経験の場を提供してくださった連合静岡の皆様には感謝申し上げます。



2025 連合平和行動 in 広島に参加して

集会での切明さんの体験証言から、犠牲者の無念さ、それを後世に伝えたいという強い思いを感じました。また、岡本さんの講話からは、自分ごととして考え次の世代に繋ぐことの必要性を強く感じる事ができました。お二人の証言や今回の体験から、まずは自分自身が学び、感じ、行動していくことが大切であり、それを子どもたちに繋げていかなければならないという思いを強くしました。



被爆者が高齢化する中で、その体験や思いを直接聞かせていただける機会は今後ますます難しくなっていくと思われます。現在様々な情報を得やすくなっているものの、記憶やそのときの思いを、言葉や感情で直接伝えていただく機会こそが、たいへん貴重であると実感しました。語りの口調や雰囲気から伝わる戦争の悲惨さ、恐ろしさ、そしてその体験と思いを後世に伝えていきたいという思いを肌で感じる事ができました。

研修後も、様々なメディアで、平和へのとりくみを取り上げられた報道を観ることがありました。戦時下の状況を多様な形で次の世代へ伝え繋ごうと努力している姿を紹介したものでした。私自身も今回の体験を生かし、子どもに近い自分の立場として、子どもが平和について考え、向き合うきっかけを作っていければと思います。



平和について深く考える研修となりました。貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。



未来へ正しく平和をつなげる



戦争のない日本が当たり前になっている現代社会において「平和」について考える機会、少なくなっている。そのような中、連合平和行動in広島に参加することができたことは、価値のあることだと思う。私自身、平和記念公園や原爆ドーム、毒ガスの島と言われた大久野島へ行ったことがあり、広島を訪問するのは初めてではなかったが、連合2025平和ヒロシマ集会に参加したのは、初めてだった。海外からの来賓も多く、平和について日本だけでなく、世界中で考えていくことが重要であることを改めて実感することができた。被爆体験証言では、切明千枝子さんから当時の様子や被爆後の苦労などを聞いた。下級生や先生など身近な人が悲惨な死を迎えるのを目の前で見なくてはならなかった苦しみは、想像もできない。戦後80年を迎え、戦争を体験した方、被爆された方が少なくなっている。この2025連合平和行動in広島に参加し、学んだことを広く次の世代を担う人たちに正しく伝えていくことは重要であり、私たちの大切な使命であることを学ぶことができた。



広島平和行動 ～思いをつなぐ～

今年の夏は日本各所で連日、酷暑に見舞われていますが、80年前の夏も厳しい暑さだったそうです。1945年8月6日に原子爆弾が投下され、甚大な被害を受けた広島を、連合平和行動としては初めて訪問しました。路面電車の交通網が発達した現在の街並みからは、当時のことは想像できませんが、原爆で大破全焼した原爆ドームや平和記念資料館内にある被爆者の遺品や写真や絵などの資料から、被害の大きさの一部を垣間見ることができました。

今回の平和行動では、被爆され、県被団連「被爆を語り継ぐ会」の岡本忠さんの話を直に聞くことができました。原爆やその被害については、これまで学校教育で学んだり、個人的にヒロシマをこれまでに5度訪れた中で、原爆ドームや平和記念資料館を訪問して様々なことを見聞したりしていましたが、被爆された方の話を間近で聞いたのは初めてでした。被爆したことを知られたくないという思いや、生きている限り消えない原爆症への悩み、当時の悲惨な状況などを、淡々と、しかし力強く語る姿から、悲しい思いを二度と繰り返さないために真実を語り継ぎたいという熱い思いを感じました。

原子爆弾が投下されてから80年、時間が進むにつれ、被爆された語り部の皆さんの数も減っているそうです。しかし、その話を聞いた私たちが一人でも多くの人に語り継ぐことで、平和への願いを広げることができます。受け取ったバトンを次代に確実に受け渡すために、平和行動での経験を一人でも多くの人に発信し、思いをつないでいきたいです。



2025 平和行動 in 広島

今年の2025連合静岡 平和行動in広島には、望月支部長が参加予定でしたが、JP労組の地方大会と日程が重なってしまい書記長の私が参加いたしました。今年は、戦後80年と言う事は無知の私でも知っている事でしたが、連合静岡の活動については何も分からないままの参加で不安で一杯でした。

初日の結団式では、平和の尊さと核兵器廃絶に向けて自分なりに何かできる事は無いかなと考えましたが、そこでは答えが出せないままでした・・・



続いて、午後の研修である「被爆路面電車学習会」では言葉の通り市内を路面電車で廻りました。いろいろな所を廻りながら、この電車が広島復興を支えてきたのだと思いました。

夕方からの「平和ヒロシマ集会」では被爆体験講和があり、当時の様子をお話頂きました。涙を浮かべながらのお話に、恒久平和の実現に頑張ろうと私も強く思いました。

翌日の「2025年広島平和祈念式典」では、1分間の黙祷を捧げることができました。外国の方が多く事にとっても驚きました。みんな平和を祈る気持ちは同じなのだと強く思いました。平和祈念資料館の入り口にある2つの日数カウンターを見て、最後の核実験からの日数「449日」の少なさには、とても残念に思います。

最終日には、「語り部講話」があり被爆体験談をお聞きすることができました。改めて世の中が平和でないと我々は安心して暮らして行けないのだと強く思いました。

最後に様々な課題はまだあると思いますが、戦後80年が、ずっと90年、100年と言われ続けるように我々はして行かなければなりません。平和は当たり前では無いと言う事をこれからも意識しながら語り継いで行きたいと思います。本当に多くの事を学ばせて頂きありがとうございました。



バトンをつなぐ

80年前のあの日も、このような空だったのではないかというほどきれいに晴れた青空。灼熱の太陽の下、ただ鐘の音に静かに目を閉じていた。

実は、私は30年前にも広島を訪れたことがある。当時はまだ小学生で、展示物や原爆遺構を「知識」として受け止めていたように思う。しかし今回は、すべての体験があの当時に感じたものとは違っていた。

今回の平和行動の中で、被爆者の切明さんの証言を聞く機会があった。切明さんは15歳の時に被爆され、自らもガラス片などで負傷しながら、下級生の手当てをしたり、亡くなった方々を火葬したりした体験を涙ながらに語ってくださった。平穏な日常が一瞬で暗転し、混乱と悲しみの中で必死に動いた若き日の記憶は、穏やかな語り口ながらも強い衝撃を伴って心に響いた。



また、1歳5か月で被爆した岡本さんの証言も私には忘れられない経験となった。被爆当時の記憶はないものの、体に刻まれた傷はその後の人生にわたり岡本さんを苦しめてきたことが、言葉から伝わってきた。静かに語られるその姿に、戦争の爪痕が

いかに深く、長く人々の人生に影響を与えるかを改めて実感した。30年前には理解しきれなかった「命の重み」や「平和の尊さ」が、今は心に深く染み渡ってきた。年齢を重ねた今だからこそ、語り部の方から発せられる言葉の一つひとつが、より現実的に、そして切実に感じられた。

戦争を体験された方は、戦争の話をあまり口にしないと感じる。それほどまでに戦争が深く人の心に傷をつけているからだと思う。しかし、今回2人もの貴重なお話を聞くことができた。岡本さんが最後におっしゃった、「バトンをつないでほしい」という言葉は、私の耳に今も響き続けている。戦後80年を迎え、直接戦争を体験した方の話を聞く機会が減少していく今、我々教員がそのバトンを受け継ぎ、未来へ残していかなければならないと、強く感じた。



2025 連合平和行動in広島に参加して

絶対に忘れてはならない8月6日。今年は被爆、そして終戦から80年の節目を迎えます。この節目の年に私は初めて広島平和行動に参加します。この平和行動で原爆ドームや平和記念資料館を訪れ、戦争の悲惨さや平和の尊さを改めて認識できた貴重な機会となりました。テレビでしか見ていない原爆ドームを目の前にした時、原爆が投下された時の状況、普通に生活していた方々は、何が起きたのか判らないほど一瞬にして多くの命を奪っていった原爆（放射線）の恐ろしさを感じるとともに、二度とこのような戦争を起こしてはならないと強く感じました。今こうして平和な日々を過ごしているありがたみも同時に感じ、平和である事の大切さを広島で改める機会がもてました。

平和行動の1日目、連合2025平和ヒロシマ集会で被爆者である95歳の切明千枝子さんが80年前(当時15歳)当日の悲劇を鮮明に語ってくれました。特に印象に残った言葉は、『広島市の市街地には被爆した子供含め多くの遺体が埋まっています。歩く時には「踏んづけちゃってゴメンね」と思ってください。』感慨深い話でした。

2日目の8月6日、平和祈念公園で原爆投下時刻8:15に黙祷を捧げました。全国、そして世界各国から多くの方々が広島を訪れ、その一人として平和を誓った。今回の平和行動に参加して、一人ひとりが平和に関心を持ち、行動することが、大きな力となるんだと、とても刺激を受けました。被爆地での「見て、聞いて、感じたこと」を構成組織に持ち帰り多くの方に伝えていきたいと思います。



2025 連合平和行動in広島

世界初の原爆投下から80年という節目の日に被爆地を訪れ、その凄惨さと恒久平和を願う人々の強い想いを肌で感じる事ができた今回の平和行動に深く感謝します。

初日の平和ヒロシマ集会では、切明千枝子さん(95歳)が長年口を噤んできた被爆体験を語られました。全身に火傷を負い、ただれた皮膚を引きずりながら学校に戻ってきた下級生を天ぷら油で看病するも、「痛い痛い」と苦しみながら目の前で息を引き取っていったこと。校庭で火葬した際の何とも言えない匂いなど、忘れたくても忘れられない情景が目に見えびました。また、「多くの犠牲者の遺骨が眠る広島を歩くときは『ごめんね』と語りかけ、原爆は二度と使わないでほしい。みなさんで平和を守ってください。これが生き残った私の願いです。」という言葉が心に深く残りました。



2日目の式典は大変混雑していたため、改めて夜に平和記念公園を訪れると、遅い時間にも関わらず多くの人々が祈りを捧げ、原爆ドーム前では平和への思いを込めた灯籠が静かに流れていました。

その他にも多くの事を学び、改めて「核兵器は二度と使われてはならない。核根絶に向け、自分にできることをひとつずつ行っていきたい。」と思える平和行動となりました。



「あの日から 29220 日」

80年前、広島に原爆が投下された。80年という数字は長いようで、決して過去の彼方ではない。しかし、当時を経験していない私には、それが現実に起きたことだと実感できずにいた。



そんな私の心を揺さぶったのが、2025連合平和行動in広島だった。被爆体験証言者の語る震える声、今も町に残る原爆ドームの静かな佇まい、資料館に刻まれた「原爆投下から29220日」「最後の核実験から449日」という数字。その全てが、歴史ではなく“生きた現実”として迫ってきた。

なぜ、あれほど悲惨な出来事があったのに、核実験は今も続くのか。答えは出ない。証言者は「自分もいつか発症するのでは」という恐怖と共に生きていると語り、その苦悩は80年経った今も消えていない。

私たちは、幸運にもその声を直接聞き、過去から託された大切なメッセージを受け取った。被爆を自分のこととして考え、できることを行動に移すこと。

平和を願うバトンは、確かに私たちの手に渡された。職場や地域、そして次の世代へとその思いをつなぎ、二度と同じ過ちを犯さぬよう、未来の命を守るために。



2025 連合平和行動in広島に参加して

今回の平和行動では、広島に原爆が投下されてから80年という節目の年に現地で様々な体験をさせていただき、非常に貴重な経験となりました。

平和集会では被爆体験証言として、原爆が投下された当時のお話をしていただきました。住んでいた町が一瞬にして地獄と化し、多くの友人知人を亡くし、更には目の前で力尽きた友人を自らの手で火葬したという、想像を絶する体験談でした。その後、若者からのメッセージとして高校生平和大使の活動報告がされ、若い世代が平和の大切さを真剣に訴える姿に胸を打たれました。

2日目に参加した平和祈念式典には猛暑のなか多くの人々が集まり、静かに祈りをささげていました。暑さ以上に、会場全体に漂う厳粛な空気が、平和への強い願いを物語っていました。

3日目は語り部の活動をされている岡本さんより、被爆体験のお話をしていただきました。原爆投下直後のみではなく、後遺症がいつ発症するか分からない不安、結婚や出産、そして子や孫にまで影響するのではという恐怖。岡本さんのお話から、被爆者の方々が背負ってきた無念や悲しみが強く伝わりました。



原爆投下から80年。当時10歳だった方も、あと10年すれば100歳を迎えます。この歴史を風化させないために、私は平和行動に参加した者の使命として、今回の学びをしっかりと周囲に伝えていきます。



戦後 80 年、節目の平和行動に参加して

「次世代のために語ることが生き残った私の使命だと考えるようになりました。」と長年の沈黙を破り二度と被爆者が生み出されないようにという決死の思いで語り継ぐ被爆者の方々の体験談を聞き胸が苦しくなった。

被爆当時15歳だった切明さんの話を聞き、歴史上の出来事というだけでなく、1人の人間のまぎれもない体験



であり、リアリティに触れる機会になったと同時に15歳での体験は記憶が鮮明な分思い出すこと自体負担が大きいのではないかと感じた。同級生の様子として全身熱傷により焼けただれた皮膚が身体から垂れ下がり、四肢から垂れた皮膚は爪に引っ掛かり体から落ちないでぶら下がっている状態であったこと。切明さん達がその垂れ下がった皮膚を引きちぎったところ、「(垂れ下がった自分の皮膚が)邪魔で歩きにくかったが歩きやすくなりありがとう」と言われたという話が重く、伝わってきた。

原爆が投下されてから80年となり被爆者の高齢化により被爆の実相の継承が課題であるとのことだが、体験者の方々が語ってくださった平和への願いを風化させることないよう未来へつなげていく必要があると感じた。



平和行動 in 長崎

日程：2025年8月7日（木）～10日（日）

千羽鶴とピースメッセージを携え、「長崎を最後の被爆地に」と平和への祈りを込め、二度と核兵器が使用されないよう強く訴えてまいりました。

今回の広島、長崎の平和行動でも昨年と同様に「語り部講話」を行程に組み込み、参加したものでなければ聞けない貴重なお話を拝聴しました。

すでに戦後80年。実体験をされた語り部となる方々の高齢化に伴い、歴史的事実をどのように後世に継承していくか？ 今後の大きな課題です。



戦後80年となる大きな節目に、長崎の平和行動に参加する事ができた。

戦争体験者そして被爆経験者の方々も相当な高齢になってきており、当時の実情を口頭で聞きく事や、新たに記録に残すことが極めて困難になっていると聞く。今回被爆された2名の語り部の女性から当時の話を聞くことができたが、いずれの方も91歳と89歳であった。

8月9日(土)に開催された式典は関係者を中心としたものであり、連合静岡として参加した私たちは遠く離れたフェンスの外で、自由参加の観覧となることから、私は宿泊先からほど近い眼鏡橋での黙とうをすることを決め、どんよりと鉛色をした雨雲を見上げながら、一人足を進めた。

昨日の語り部さんから、原爆が投下された1945年8月9日も、厚く覆われた雲が長崎市内全域を囲むようにビッシリと立ち込んでいたという説明を聞いたが、まさに今日の様な空だったのだろう。目的地にしていた眼鏡橋に到着したのが10時38分であったが、まわりを見渡せば観光客の方々ばかり。80年前と同様の鉛色の雲と観光客とのギャップに、そこに居たたまれなくなった私は、現地の方々と一緒に黙とうをしたいという衝動に駆られ、市内で一番大きいと思われるアーケードに向かった。



そこには11時近くという事もあってか、大勢の市民の皆さんで賑わっていたが、11時02分、甲高いサイレンが鳴り響くと同時に、人の波は潮が引くように両サイドに二分され一斉に黙とうを始めた。

戦いから80年が過ぎ「平和と命」という人類の課題が、後世にどれだけ伝わっているのかと考えながらの平和行動であったが、80年が経った今でも市民の皆さんには、しっかりと語り継がれていると確信した。



戦後世代を「次世代の語り部」として育成する取り組みも始まっている事も聞き、連合の平和行動に参加した私たちも、その一端を担う一人として「平和の大切さと命の尊さ」や、どんなに社会が変化しても「逆転しない正義」とは何かを伝えていきたい。

「2025連合平和行動 in 長崎」に参加して
～長崎が最後の被爆地になるように～

戦後80年が経ち、徐々に被爆体験者が少なくなるなかで、体験した者にしか解らない描写、感情、その場の臭いの話など、我々14名の為だけの貴重な「被爆体験語り部講話」で長崎平和行動の幕が開けました。



2日目以降の「連合2025平和ナガサキ集会」「ピース・ウォーク」を通じ、「話し合いで解決、時間はかかっても良い」、「不安定な核抑止力=人間の判断ミス、機械のミス」、「核:難題を解決できるのは人間の心でしかない」、「地球市民」といったキーワードに共感し、平和のために自分に何が出来るか?を考えさせられた4日間となりました。

その場に行って、その場の雰囲気を感じて味わってこそ分かる熱量を忘れずに、静岡に帰ってからも組合活動を通じて自分が出来ること、「笑顔であいさつ」から「国政において平和に通じる為政者の見極め」など様々なレベルでの平和活動が、長崎で被爆された方への鎮魂になると感じました。その思いを忘れずに行動していきます。

最後に、今回の平和行動に参加する機会をいただいた東遠地協の皆さん、充実した4日間を共に過ごした総勢14名の皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

被爆 80 年を“長崎”で。

被爆80年という節目の年に、初めて連合の平和行動に参加しました。8月9日、爆心地公園の中心碑前で11時02分を迎え、黙祷を捧げました。会場の雰囲気、胸の奥が締めつけられるような感覚に襲われ、気がつけば身震いをしている自分がいました。

語り部としてお話しいただいた松尾幸子さん（当時11歳）、羽田麗子さん（当時9歳）の被爆体験は、想像を絶するもので、一言一言が心に深く突き刺さりました。語り継ぐことの重みと尊さを、身をもって感じ、80年前の出来事を私たちに語り続けてくれることに感謝はありません。

また、「ナガサキ・ユース団」や「高校生平和大使」の学生の真剣な眼差しに、未来への希望を見出すと同時に、自分自身の中学生時代、被爆50年の核廃絶を訴えた弁論大会の記憶が蘇りました。

今回の長崎での経験・体験は、私の心に深く刻まれました。この想いを家族や仲間に加え、平和の尊さを語り継いでいきたいと思います。継承することが私たちに残された使命です。

最後に、このような貴重な機会を与えていただいたことと共に行動した素晴らしい仲間に、心から感謝しています。そして、多くの方に平和行動に参加していただき、平和を願う気持ちが繋がっていくことを心より願っています。



被爆地公園の中心碑での黙祷



羽田さんの被爆体験



2025 連合平和行動in長崎

まず初めに戦後・被爆80年という大切な節目の年に、平和行動に参加させていただいたことに深く感謝いたします。行動日程は8月7日(木)～8月10日(日)の計4日間でした。戦争の記憶が風化しつつある今、戦争の悲惨さや愚かさを忘れることなく、改めて平和の尊さを学び、自組織のみならず地域や家族へも発信していきたいという思いで参加しました。

長崎は4日間とも雨の予報で、無事に平和行動が行えるか不安もありましたが、羽田空港で団結式を行い、現地長崎へ向かいました。雨の影響で到着が遅れたものの、予定さ



れていた被爆体験者による語り部講話を聴くことができました。これまで資料や文献でしか知り得なかった当時の様子を、実際に体験された方の言葉で聞くことで、胸が締め付けられるような衝撃を受けました。

その後、同行した皆さんと自己紹介を兼ねて懇親を深め、今後3日間ともにする同志としての絆を築くことができました。

翌8月8日(金)は、午後から長崎県立総合体育館にて「連合2025平和ナガサキ集会」に参加しました。被爆体験者の訴えに加え、長崎大学核兵器廃絶研究センター長・吉田氏による国際政治と核兵器の現状についての基調講演、ナガサキ・ユース代表団や高校生平和大使による活動報告と平和へのメッセージがありました。中でも「ビリョクだけどムリョクじゃない」「1人の



一歩より10人の一歩」という言葉が印象に残り、若い世代が積極的に活動をし、過去の悲劇を風化させず未来に向けて平和を築こうとする姿勢に強い希望を感じました。同時に、自分には何ができるのかを深く考えさせられる1日となりました。

8月9日(土)は午前中に長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典、午後には折り鶴の奉納やピースウォークに参加しました。原子爆弾投下中心地碑、浦上天主堂遺壁、被爆当時の地層、防空壕群、平和の泉、長崎の鐘、浦上刑務支所、平和記念像

などを巡り、連合長崎の青年委員会・女性委員会の皆さんがピースガイドとして各所で説明をしてくださいました。その他にも多くのモニュメントや当時の写真が展示



されており、写真を目にした瞬間、自然と涙がこぼれました。本来であれば平和への願いを込めた万灯流しも予定されていましたが、河川の増水や氾濫の危険に鑑み中止となりました。空いた時間には、原爆資料館や平和祈念館を訪れ、戦争や原爆の恐ろしさを改めて学ぶことができました。そして、こうした出来事を後世に語り継ぐ責任

があると強く感じました。

今回の体験を通じて私は「平和は誰かが守ってくれるものではなく、自分たちが守り、育てていくものだ」と実感しました。日常の中で平和について考えることは少ないかもしれませんが、こうした行動に参加することで、改めてその大切さを心に刻むことができました。

今後も、平和のためにできることを探し続け、行動していきたいと思います。

最後に、この4日間、連合静岡の参加メンバーを取り纏めてくださった白戸団長をはじめ、共に行動をしてくださった各労組の皆さん、そして全員が安全に行動できるよう引率してくださったユニオントラベルの鈴木さんに、心より感謝申し上げます。



被爆 80 年の長崎で感じたバトン

この度、連合平和行動in長崎に参加させていただき、被爆80周年と言う節目の年に戦争と平和について改めて深く考える機会を得ました。

初日には、被爆者である松尾幸子さんの語り部講話を聞きました。

原爆によって一瞬で家族の絆が引き裂かれた話は、非常に重く、当時の悲しみや恐怖が鮮明に伝わってきました。戦争経験者が年々少なくなるなかで、このような生の声を直接聞ける機会は大変貴重であり、後世に語り継ぐ責任を感じました。

二日目の連合平和集会では、全国の連合の仲間が集い世界平和の思いを共有しました。また、被爆80年という歴史の節目に、今なお増え続けている核兵器廃絶の必要性和次世代への継承の重要さを強く感じました。特に若者たちが真剣に平和活動に取り組む姿が印象的で、自ら学び、声を上げ、行動する姿は希望そのものであり、平和のバトンが確かに受け継がれていることを感じました。

三日目は、原爆が投下された8月9日であり、午前11時2分の市内一斉黙祷に私も参加しました。

この時間、個人行動をとっていた私は、道の真ん中で一人黙祷することに恥ずかしさがあり、あるイベント会場に行って黙祷を捧げましたが、後に、この日は小・中・高すべての学校が登校日になっている事や、その時間は路面電車も一斉に停止し、道路上でも殆どの市民がその場で足を止めて黙祷を捧げているという事を聞き、長崎市民が抱き続けてきた世界平和と原爆の悲劇を二度と繰り返してはいけないという強い思いがひしひしと伝わってきました。

午後は、ピースウォークに参加しました。ピースウォークでは、連合長崎さんに平和公園を案内していただき、被爆により石柱がずれた遺壁や原爆によって破壊された瓦やレンガ、溶けた瓶などが埋没している地層を見て、改めて原爆の威力の凄まじさを肌で感じました。

この三日間を通して、私は、平和は与えられるものではなく、人間が守り続ける努力が必要だと実感しました。戦争を知る人が少なくなる今だからこそ、私たち一人ひとりが学び続け、平和の大切さを語り継いでいく責任を感じました。被爆80年の節目に得たこの思いを日常の中で行動し未来へつなげていきたいと思います。



最後に、今回このような機会を与えていただいた連合静岡に感謝申し上げます。

平和の大切さを伝えていくこと



初日に追悼平和祈念館にて語り部の方から、被爆体験のお話を聴かせていただきました。語り部の方は、被爆された当時の出来事を事細かにお話され、その後の後遺症や被爆者への差別についても触れられました。80年経った今でも忘れることはできない悲惨な出来事だったのだと感じました。

最後に「戦争や核の恐ろしさを多くの人に伝えてほしい」と強くお話されました。

翌日は連合平和集会に参加し、別の語り部の方からもお話を聞く機会がありました。前日同様に当事者から直接話を聴くと、原爆が与える影響についてより実感を持ちました。語り部の平均年齢は86歳となり、年々高齢になり人数も少なくなっていると話しされました。また、10代のナガサキ・ユース代表団の方から、「語り続けることは平和の第一歩、継承を大切にしている。被爆者がいらっしゃる間に話を聴き、私たちが伝えていく」と力強い発言がありました。学生時代は授業で戦争に触れる機会がありましたが、社会人になると機会がなく、戦争への意識が薄くなっていました。今回の平和行動で感じたことを忘れずに、様々な場面で伝えていくことを実践したいと思います。

3日目、長崎で原爆が投下された8月9日午前11:02には、私も眼鏡橋付近で黙とうして被爆された方への祈りを捧げました。この日時は今後も忘れることなく、毎年祈りを捧げたいと思います。



核兵器の恐ろしさを伝えていくのは自分たちの仕事

被爆を経験された語り部の方のお話を聴くことができる期間はそう長くはない。今後語り部の方がいなくなってしまう時、核兵器の恐ろしさや戦争の愚かさ悲惨さを後世に伝えていくことができるのだろうか。いや、伝えて行くのは自分たちだ。私は今回の平和行動に参加しこのように強く感じました。

今回の平和行動では語り部の方からのお話をきく機会が2度ありました。その口



調はついこの間起きた出来事を話しているようで、原爆が投下されたのは自分が生まれるよりもずっと前に起きた遠い昔の話ではない、現代の日本で起きた事実であることを強く意識させられるものでした。これはテレビなどから得る情報では決して感じることはできない感情だと思います。

私はより多くの方に語り部の方の話を聞いてほしいと感じました。しかし、現在語り部の方の平均年齢は87歳を超えています。直接お話を聞くことができるのもそう長くはないでしょう。現在様々な方が語り部の方の経験の継承を強く推進しています。私もこの問題を人任せにすることはせず自身も家族や友人、地協の仲間に伝えていこうと考えています。まずはあった人に今回の経験を話すことから始めていきます。



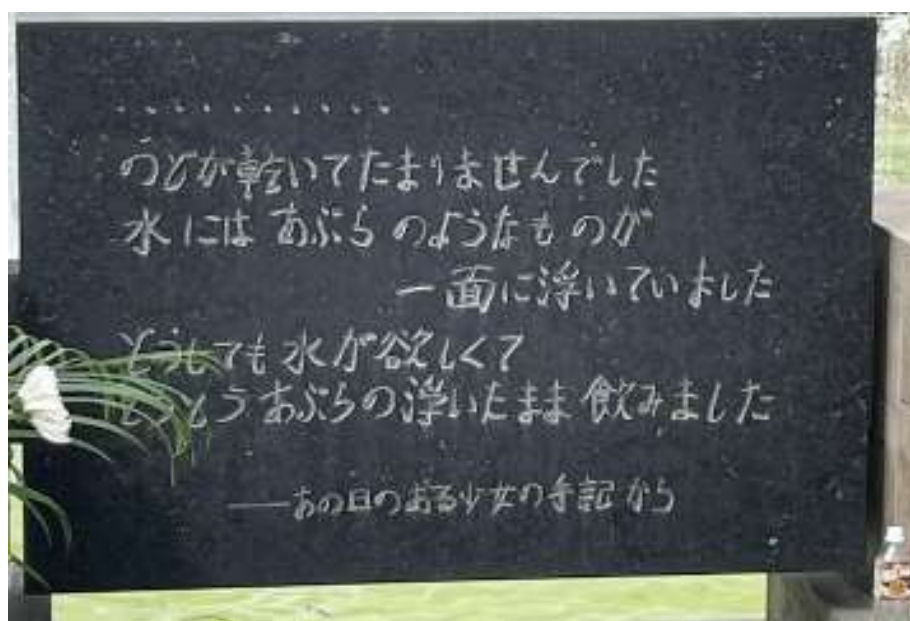
2025 連合平和行動 in 長崎

今回の平和行動では、「記憶を継承する責任」と「対話による平和構築の可能性」を強く感じました。長崎原爆の被害を伝える語り部の講話では、家族を失い、差別を受けながらも語り続ける姿に、戦争の非人道性と核兵器の残酷さを改めて認識しました。被爆体験は過去の出来事ではなく、今を生きる私たちが未来に向けて行動するための教訓そのものだと感じました。

国立追悼平和祈念館や原爆資料館では、静寂の中に込められた祈りと展示された遺品や証言が語る「生きた記録」に触れ、当たり前ではない平和の尊さを改めて実感しました。また、平和集会の長崎大学RECNA講演では、核兵器の現状と課題を学び、科学的知見と市民の声が連携することの重要性を理解しました。現役高校生、大学生たちの「平和の意思を繋ぐ意識」の高さを目の当たりにして、現地教育や風土による当事者意識の醸成が大切だと痛感しました。

ピースウォークでは、爆心地公園や平和の泉を訪れ、犠牲者の声に耳を傾けながら歩を進めました。碑文に刻まれた少女の言葉は、命の尊厳と水への渴望を象徴し、平和の本質を問いかけてきました。暑い中での訪問でしたが、当時被爆された方々の状況を聞くにつれ、寒気がする瞬間すらありました。

労働組合の活動もまた、対話と協力によって築かれる「職場の平和」であり、社会の持続可能性に貢献するものだと思います。戦争の記憶を風化させず、利他的な精神をもって仲間を守り、平和な未来を次世代へつなぐことが、私たちの使命であると再確認しました。



労働組合運動と平和への思い

今回の平和行動で最も心に残ったのは、語り部の方がおっしゃった「話し合いで解決」という言葉です。

戦争は、国益や勝利を優先する利己的な姿勢に基づくものですが、広い視点で見れば「自国を守る」という利他的側面を持つと解釈されることもあります。しかし、原爆投下は非人道的で破局を招く行為であり、決してあってはならないものだと思います。やはり、平和は相手を尊重し、互いに譲り合う利他的な精神によって築かれるべきだと、改めて強く感じました。核兵器が抑止力として存在することは、決して許されるべきではありません。

私たちの組合活動も同様に、対立や課題を力で押し通すのではなく、対話と協力、そして相互扶助によって解決を図ることが重要です。職場での交渉や権利擁護は、まさに平和構築の縮図であり、利他的な心こそが持続可能な社会を支える基盤になります。

今年は「国際協同組合年」です。戦争や紛争がまだまだ続く現実を直視しつつ、職場や地域での協力と共助を広げ、対話による解決文化を根付かせる使命を強く感じました。被爆地・長崎で過ごした3日間は、平和の尊さと労働組合の社会的使命を再確認する貴重な時間となりました。

核兵器廃絶と戦争防止は、国際政治だけでなく、一人ひとりの価値観と行動から始まります。今回の学びを組合活動に生かし、利他的精神で仲間を守り、平和で公正な社会を次世代へ継承していく必要性を、改めて強く認識しました。



連合静岡「2025 年平和行動 in 長崎」

8/7～8/10の3泊4日の日程で参加させていただきました。学生時代に広島には行ったことがありましたが、長崎は初めてでした。全体を通して感じたことは、知ったつもりで何も知らなかったという感想です。学校の授業や、ニュースなどでは分からない、本当に被害に合われた方の心情や、現地に残されたリアルな被害、その時にどんな暮らしをされていたのかなどを知ることができ、大変貴重な時間になりました。

初日は語り部の先生からお話を聞き、当時11歳で鮮明に記憶がある方のリアルな話をお聞きしました。家族が次々と原爆の被害で亡くなっていき、感覚も麻痺していく当時の状況、また今も放射能が原因と思われる病気に悩まされている中、寝たきりではなく、自分の体験を伝えることができるから幸せだとおっしゃっていました。語り部講話を直接聞く機会は中々ないと思いますが、動画もあるため積極的に聴講していきたいと思いました。

2日目は連合2025平和ナガサキ集会へ参加しました。原子爆弾の投下と被害状況の資料から、改めて悲惨さが確認できたとともに、今現在もおおよそ12,000発もの核弾頭が存在することを知り衝撃を受けました。ただ、右肩下がりで減少している事実も知ることができました。また、学生も多数参加されていることに驚きました。

3日目はピースウォークへの参加と、原爆資料館、浦上天主堂の見学をしました。被爆当時の地層が見学でき、爆風により上空からの圧力で地層になるほど押しつぶされてしまった様子が確認でき、原爆の威力を再認識しました。平和記念像の大きさを見て、平和に対する思いを感じた一方で、ひとりごとという詩の中の"石の像は食えぬし、腹の足しにならぬ"という文から、被爆者の複雑な思いを読み取れました。

原爆資料館では、実際の原子爆弾「ファットマン」の模型があり、どのような原理で核分裂を起こしたかの記載があり、興味があり「リトルボーイ」についても調べま

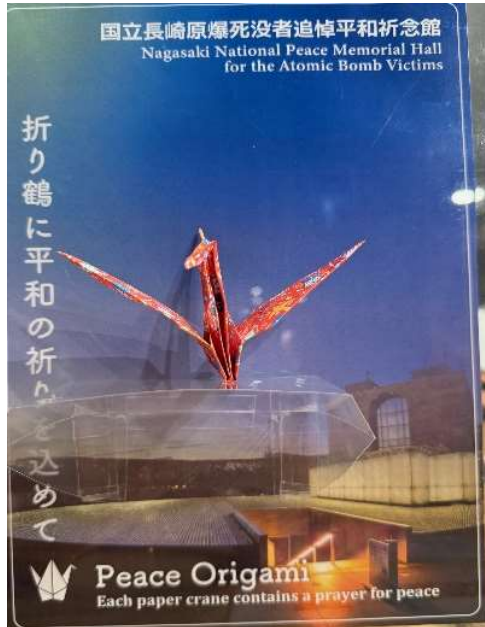


した。なぜこの技術を人を殺める爆弾にしてしまったのか。あの時米国が日本に投下したことは正解だったという外国の方の意見を過去に見ましたが、どのような状況でも、人類が人類に投下していいものではないと感じました。

今回の平和行動で感じたことは、私たちは歴史を学ばなければならないし、知らない方に丁寧に伝えていかなければならないということです。また、先人の行いに感謝はすれど、反省はする必要がないと感じています。ただ過去を知り、自身の先祖への感謝、そして周囲の繋がりに感謝をし、未来の平和に繋げていくことが私のやるべきことと、今回学ばせていただきました。貴重な機会をいただきありがとうございました。



平和行動に参加して感じたこと



私は、今回の平和行動で初めて長崎市を訪れた。長崎は風情がある素敵な街で、原爆投下後も長崎の方は負けずに街を復興させてきたのだと実感した。

今回の平和行動を通じて私が一番感じたのは、「平和を想う強さの違い」である。語り部の方のお話やピースウォーク・原爆資料館見学等で原爆投下の残酷さを肌で感じた。なかでも特に私は印象的だったのが、黙祷の時間だ。

8/9AM 11:02 私は長崎駅前のロータリー広場にいた。黙祷のアナウンスが流れると、老若男女問わずピタッと立ち止まって黙祷をし、街全体

が静まり返る独特な雰囲気、静岡では見たことのない光景だった。

また、8/9は朝から学生の団体を街中で何回か見かけた。長崎市では、平和について学ぶ日とし、小学校～大学まで登校日になっているそうだ。ここにも平和を継承していくための長崎の想いの強さと違いを感じた。それと同時に、子供たちだけではなく、私たち大人も学び続けなければいけないと感じた。

昨今はSNSの普及もあり、自身が興味のない分野のニュースや情報はなかなか得にくい。核を保有している国が減っていないことを知らない人も多くいると思う。しかし、世界で唯一の被爆国である日本だからこそ、正しい知識を付け、二度とあんな悲惨な出来事が起きないように訴えていかなければいけないと思った。だから私は今回の平和行動を「ただ聞いてきただけ・見てきただけ」で終わらせないためにも、私はこの経験を周囲の人たちへ共有していきたいと思う。



長崎で知る、核兵器の愚かさと平和

漠然とした「非戦・非核」の思いを胸に、原爆投下地である長崎を訪れました。

長崎は江戸時代から日本の玄関口として栄え、第二次世界大戦中は軍需工場が集中していたため、原爆投下の第二の目標となりました。被爆者の方々の証言は、戦時下の厳しい生活を具体的に伝えてくれました。物資不足によってご飯が食べられない、学校が閉鎖され教育を受けられない日常など、現代からは想像もつかないような過酷な現実には胸が痛みました。

被爆当日の閃光、轟音、そして強い衝撃の後に広がる光景は、まさに筆舌に尽くしがたいものでした。燃え盛る街、異臭が立ち込める中で横たわる遺体、そして水を求めた人が一口

飲んで亡くなる様子。核兵器の恐ろしさを肌で感じましたが、その中でも、わずか10歳の子どもが地獄のような惨状を前に恐怖や悲しみを感じなかったという証言は、何よりも重く、深く胸に突き刺さりました。

今回の活動を通じ、戦争と核兵器の愚かさ、そして平和の尊さを改めて痛感しました。「微力だけど無力じゃない」という高校生平和大使の言葉を胸に、この貴重な体験や教訓を家族や周囲の人々に語り継ぎ、平和を守るために行動していきたいと思います。



平和行動 in 根室

日程：2025年9月5日（金）～8日（月）

連合は、北方領土の四島返還と日ロ平和条約の締結を求める運動を展開しています。歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方四島は、日本固有の領土です。しかし、第二次世界大戦～太平洋戦争終結時にソビエト（現ロシア）によって不法占拠され、住民は島を去ることを余儀なくされました。ロシアによる不法占拠は今に至るまで続いており、故郷を追われた元住民の方々は、お墓参りさえ自由にできない状態が続いています。

北方領土の早期返還、そして日ロ平和条約の締結もまた、安心して暮らせる平和な社会の実現に欠かせないものなのです。私たちは、今後も北方四島の早期返還に向け、返還運動に粘り強く取り組んでいきます。



2025 連合平和行動 in 根室に参加して

「終戦から80年」。メディアでその言葉を聞く私は、日本の敗戦と軍事行為が終了し長い年月が経ち、戦争は「過去の出来事」になったと漠然と考えていました。しかし、今回の北方領土返還集会に参加し、改めて実感したのは、市民にとっての戦争は、軍事行為の終結だけでは終わらないという事実でした。沖縄、広島、長崎、そしてこの根室の地で、ごく普通の生活を送っていた人々が受けた苦しみや悲しみは、今なお続いているという現実を痛感しました。



特に、北方領土の問題は、先の戦争が残した中でも、特殊な様相を呈していると感じます。戦時中ではなく敗戦直後から始まった事案であること、何の落ち度もないのに故郷を追われた元島民の方々の理不尽さ、長年にわたる返還運動が難航していることなど、もどかしさは計り知れません。そして、国民全体の関心や熱量が薄れてきているという現実も、この問題の解決をさらに困難にしているのではないかと感じました。

今回の集会は、私にとって大きな学びの機会となりました。恥ずかしながら、私は国後島や択捉島が沖縄本島よりも広いという事実を知りませんでした。北方領土返還運動は、地図上の小さな島々を取り戻すだけの話ではないのです。それは、日本の領土、そして国民の尊厳を取り戻すための、非常に大きな取り組みなのだと気づかされました。

今回参加した私たちの役割は、この集会で感じたことを決して忘れないこと、そしてそれを次の世代へと繋げていくことです。北方領土の現状、そして元島民の方々の切なる想いを、職場や家族に語り継いでいくことで、この運動を継続させ、大きな国民的なうねりへと拡大していくことが重要です。戦争はまだ、終わっていません。こ



この集会が、その事実を多くの人に伝えるための、新たな始まりとなることを願わずにはられません。

最後に、台風15号の影響で新幹線や航空機が遅れ、初日の予定がずれてしまいましたが、無事研修を終えることが出来ました。対応していただいた連合静岡の西崎さん、ユニオントラベルの山下さんには改めて感謝申し上げます。

交流再開への架け橋として——現地で感じた北方領土問題の今

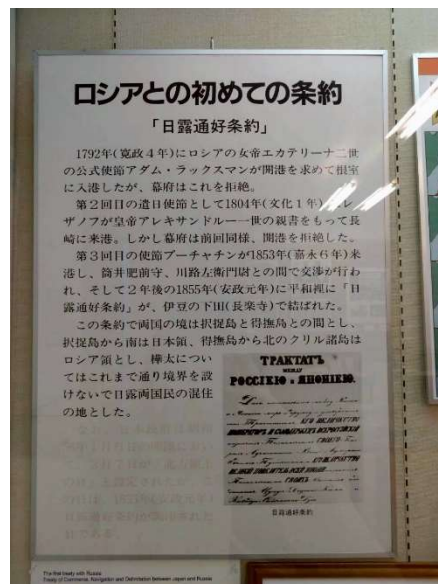
「民間交流の再開」こそが、北方領土問題の平和的解決への第一歩であり、私たちが果たすべき重要な役割だと強く感じました。民間交流の土台はすでに築かれていましたが、コロナ禍の影響やウクライナ情勢により、現在その交流は一時的に途絶えています。この状況を危惧するとともに、次に訪れる再開の機会を絶対に逃してはならないという思いを強くしました。

現地を訪れたことで、地図では伝わらない距離感と現実の重みを肌で感じました。この地に立たなければわからないことがあると実感します。学習会では、地理的背景を踏まえ、この問題がなぜ解決に至らないのかを学びました。いち早く交流を再開したいと願っているのは、おそらくロシア側の島民も同じでしょう。元島民の高齢化により活動が弱体化することは、何としても食い止めなければなりません。



史実を正しく認識し、冷静に向き合う姿勢が求められています。

根室・納沙布を訪れてみましょう。個人での訪問が難しければ、平和行動に参加するという方法もあります。現地に立つことでしか得られない学びがあります。ぜひ多くの人に、実際に現地を訪れ、感じ取ってほしいと思います。



2025 平和行動 in 根室に参加して

このたび「連合の平和行動 in 根室」に参加し、貴重な経験をする事ができありがとうございました。

二日目の「2025平和ノサップ集会」では、あいにくの曇り空ではありましたが、ノサップ岬から北方領土を望むことができました。島影は思っていた以上に近く、肉眼ではっきりと確認できたものの、そこへ渡ることはできない——その現実を目の当たりにし、強い無念さと切なさを覚えました。領土問題が、戦後80年近くにわたり続いている課題であることを改めて実感しました。



また、元島民の方々から「ふるさとに戻りたい」という切実な思いを直接伺い、その重みを肌で感じました。目の前に見えている土地に戻れないという悲痛さは計り知れず、平和の尊さを次世代に語り継いでいくことの重要性を強く心に刻みました。

さらに、4日間を通して地協や全国から集まった仲間と共に行動する中で、地域や職場を超えた連帯や絆を実感しました。平和の実現は容易ではありませんが、労働組合が果たす役割は決して小さくないと再認識しました。今回得た学びと気づきを、家族や職場など身近な人々と共有してまいります。



最後に、このような貴重な機会を準備くださった主催者の皆さま、また運営に携わってくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



伝え続けることの大切さ

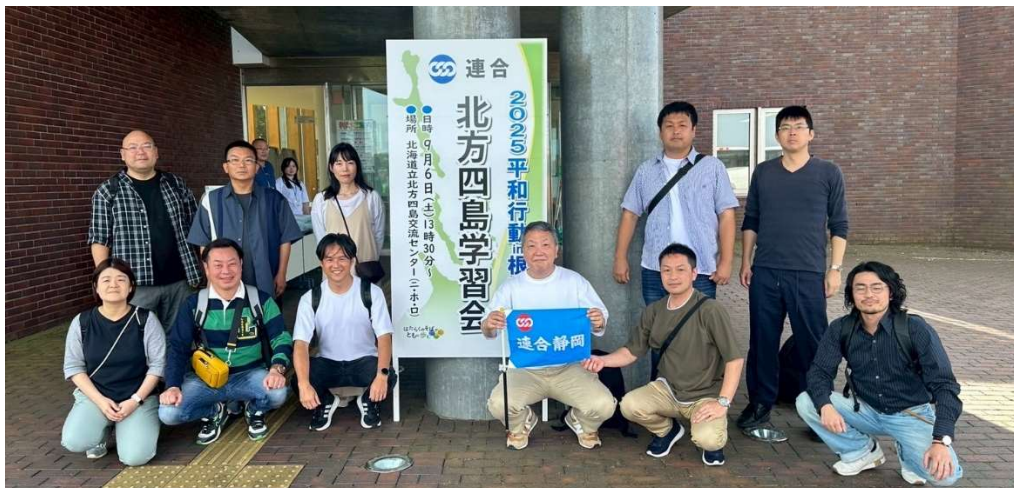
「近くて遠い故郷」

平和集会の中で印象に残った言葉です。平和集会が行われた納沙布岬からは、北方四島の一部の島が見えました。そんな近い場所にある島だが、行くのは容易ではないですし、先祖のお墓参りでさえも自由にできません。今回の平和行動で北方四島について知れば知るほど、この言葉が表す意味の重さと元島民の方々の辛い気持ちを強く感じました。

今回平和行動に参加するまで北方領土についてニュースで見ることはあっても詳しく知りませんでした。一旗揚げようと島に渡り築いたものがあったが、全てを置いて島を離れて強制送還されてしまいました。その後の生活の苦しさ、故郷に帰りたいと願っても叶わず80年もの月日が流れてしまっているということが元島民の方から語られていました。この苦しみは想像を絶するものだと思いますし、これまでそれを知らなかった自分が少し恥ずかしくも感じました。



戦争の悲惨さを語る際に、あまり北方四島について語られているのを見聞きする機会が私自身ありませんでした。平和集会の中で度々「伝え続けることの大切さ」が話されていました。平和行動に参加し、直接見聞きしたからこそ感じたことを多くの人に伝えることが参加した者に課された役割だと思います。教員という立場で、授業の中で戦争について話をする機会があります。その中で子どもたちにもこの話をし、少しでも多くの人に伝え広めることができたと思いますし、それが少しでも北方四島の返還運動の前進に繋がることを願っています。



2025連合平和行動in根室に参加して

9月5日～8日の4日間、連合主催の平和行動に初めて参加させていただきました。

自身の平和行動への参加は、7年前の原水禁世界大会広島大会以来、2回目となります。当時、被爆された方の体験談、平和式典の参列、資料館の見学などを通じて戦争の悲惨さ、平和の大切さを実感したことを思い出しました。今回の北方領土問題は、何となく理解しているくらいで、正直言えば無関心でした。

平和行動の初日、北海道立北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）で行われた、北方四島学習会に参加し、山田吉彦参議院議員より「海から考える北方領土返還運動」について聴講しました。東アジア諸国から見た日本領海の重要性や、日本の海洋資源、日本とロシアでの北方四島における「観光」「海産物の養殖」、共同経済活動のプロジェクト形成を切り口とした、違う角度からの北方四島返還に向けた研究などを聴講しました。日本政府も様々な交渉の仕方を考えている現状を考えると、ロシア政府との交渉は、さらに長期化するのではないかと感じました。

また、「ふるさと北方四島への想い」をテーマに講師の元島民の方から、当時経験した様子や故郷への想いについて講演がありました。講師から「元島民の方の平均年齢は、90歳になることから、早期解決を目指すだけでなく、次世代に繋いでいくための活動を行っています。この北方領土問題への関心が薄れていくことを危惧しているので、今回参加の皆さんも家族や職場の方に北方領土問題を広めてほしい」との訴えがあり、学習会に参加した私たちもこの問題を広めていく活動が重要であることを学びました。

平和行動の最終日、納沙布岬・望郷の岬公園で開催された、「2025平和ノサップ集会」では、曇り空と霧、小雨、雲と雲の間から少し青空が見える、変わりやすい天候で北方領土の島々がほとんど見えず、とても残念でした。集会の中で印象的だったことは、元島民の方の訴えで、「あの戦争がなければ、悔やんでも悔やみきれない」という言葉、当時の状況と戦後80年が経過してもなお、故郷を奪われ、近くにあっても自由に行きたくてもいけない思い、悲しみは未だ癒えることない現状、1日でも早い領土返還を願う強い想いが印象に残りました。

最後に北方領土問題に対し、私たち自身ができることは、更に問題への理解を深め、元島民の方々の想いを多く方に伝え、関心を広げることが重要であると感じました。



「2025 連合平和行動 in 根室」に参加して

私は今回初めて「2025連合平和行動in根室」に参加させていただきました。

「北方四島学習会」では、前半に「海から見た北方領土問題」と題して、ご講演をいただき、日本の海洋問題や海洋資源などの観点から北方領土問題を学びました。後半には「ふるさと北方四島への想い」と題して、元島民のお二人より80年前に突然追われた故郷に対する想いをお聞かせいただきました。その中で特に印象に残ったことは「北方領土返還運動は当然大切なことであるが、北方領土問題を次の世代に伝承していったほしい」との訴えでした。2025年元島民の方々の平均年齢は89.6歳、今の私たちができることは何なのか？考えさせられる学習会となりました。



翌日は納沙布岬にて開催された「2025平和ノサップ集会」に参加させていただき、全国各地から集まった多くの仲間とともに、北方領土問題解決に向けた心合わせをしました。また、実際に北方領土を目視で確認することで、改めて北方領土返還運動の重要性を感じることができました。

今回「2025連合平和行動in根室」に参加させていただき、平和の大切さ、北方領土問題を伝承していくことの重要性を感じることができました。当事者ではない私たちも、北方領土問題を風化させることがないように今回学んだことを周囲に伝えていきたいと思います。

最後に「2025連合平和行動in根室」に参加させていただく機会をいただき、大変ありがとうございました。



2025 平和行動 in 根室 参加レポート

1. はじめに

私が北海道を訪れるのは、今回が3回目であった。1回目は函館、2回目は札幌・小樽・旭川などいわゆる道央地方。今回の道東地方は初めての訪問である。同じ北海道とはいえ、まったく違う街並みや景色を見ることができた、

今回、縁あって「2025平和行動in根室」へ参加させていただくことになった。組合員の代表として、決して忘れてはいけない北方領土の歴史、そして現在の世界の平和について学び、考えさせていただく機会となった。

2. 「北方四島学習会」

「北方四島学習会」として参議院議員の山田吉彦さんより「海から見た北方領土問題」と題した講演と、元島民である角鹿泰司氏と児玉泰子氏より故郷・北方四島に寄せる想いを聞くことができた。

幼いころの出来事とはいえ、鮮明な記憶のもと語られる島での生活や、島を離れたときの劣悪な環境など大きな驚きを感じた。

元島民の方の故郷に対する思いは強く、今もなおこの問題は、全く終わりが見えない状況にあることを改めて実感することができた。



北方四島学習会

3. 「2025平和ノサップ集会」

納沙布岬の望郷の岬公園にて、「2025平和ノサップ集会」に、全国の構成組織・地方連合会から訪れた653名の一員として参加した。訪れた当初は曇っていた天候が徐々に回復し、歯舞群島の一つである貝殻島を見ることができた。まさしく「近くて遠い北方領土」を実感することとなった。



納沙布岬より見える景色

4. 終わりに ～教員として、組合にかかわるものとして～

9月7日付の北海道新聞には、この平和行動の写真が掲載されていた。北方領土について、地元紙であるからこそ紙面が割かれている。社会科教員として、新聞を始めとするマスコミの情報とどのように向き合っていくか。そして、未来ある子どもたちへ、それを育む大人たちへ、平和について語っていくことの大切さを改めて感じる事ができた。今回、学習会、平和行動への参加や、各資料館、そして北方領土の歴史を感じる場所を辿ることもできた。実際に見聞したものは何よりも勝る。その経験を子どもたちへ伝えていくこと。それは、決して繰り返されてはいけない歴史について考える子どもたちの姿を育てていくことである



2025 年 9 月 7 日 北海道新聞より





今回、初めて連合の平和行動 in 根室に参加させていただきました。

私がこの地を選んだのは、北方四島や領土問題について義務教育で学んだ程度の知識しかなく、その多くを忘れてしまっていたため、日本人として、また労働運動に携わる者として一から学び直したいと考えたからです。学習会やノサップ岬での集会

を通じ、改めて史実に触れることができました。

北方四島（歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島）は日本固有の領土ですが、1945年8月15日のポツダム宣言受諾後もソ連軍は侵攻を続け、8月28日に択捉島、9月1日に国後島・色丹島、9月3日には歯舞群島を占領しました。その結果、約17,000人の島民が本土への強制引き揚げを余儀なくされ、以来ロシアによる不法占拠が続いています。

かつてはビザなし交流や元島民の墓参、北方四島に滞在するロシア人への人道支援などが行われていましたが、ロシアのウクライナ侵攻以降交流は途絶えました。元島民の方の「再び故郷の地を踏みたい」という切実な願いを聞き、胸が熱くなる思いでした。元島民の平均年齢はすでに89歳となり、一刻も早い交流再開が望まれています。連合としても平和行動を通じて支援を続けることに意義があると実感しました。今回の学びは貴重な機会であり、学んだ史実を風化させず、仲間や組合員へ伝えていく決意を新たにしました。



2025 平和行動 in 根室についての所感

今回の根室での北方領土問題に関する平和行動を通して、今まで学校でしか聞いてこなかった話を自らの五感で感じ、取り巻く課題の解決に向け関わった人間が受け継いでいかねばならないと感じた。

特に印象に残ったことは元島民の方々の体験談と、この80年抱え続けた故郷と先祖への思いであった。少なくとも齢80



を超えた方々であり、当時の記憶を残す方の話を聞けるのはとても貴重な時間であると感じたからだ。今回語りをいただいた角田さんは当時8歳、児玉さんは当時3歳だったそう。角田さんのお話では、実父の30年が無に帰した無念さや、戦争により失われた時間の大きさを感じた。また児玉さんは幼すぎて自分の記憶はないが父母や祖母の行動からふるさとへの思いを感じたと述べていた。このように当時の記憶を聞けることは、惜しくも、近いうちに叶わぬこととなるだろう。今回の平和行動がいかに貴重な時間であったかと思う次第である。

元島民の方々の平均年齢は89歳を超えたという話であった。既に日本人の平均寿命を超え、残された猶予も幾ばくもないことを認識し、受け継いでもらわねばならぬという思いがひしひしと伝わってきた。領土問題は国際的な政治的思惑や安全保障も関わり、非常に難しい問題で、解決には一筋縄ではいけないと思う。それには今回の平和行動で壇上の方々が言われていた通り、バトンを受け継ぎ、声を上げ続けていくことが何よりも重要だ。

生まれも育ちもまったく違う私だが、同じ日本人として、自分の家族や子ども、周囲の人々にも実状を広め、受け継いでいきたい。



平和行動 in 根室



私は初めて平和行動に参加し、北方四島学習会と2025平和ノサップ集会に出席しました。そこで、自分自身がいかに北方領土問題に対して関心を持っていなかったかを痛感しました。ノサップ集会で根室市長の「北方領土が返還されて、ようやく我々の戦後が始まる」という言葉が特に印象に残っています。

北方領土の不法占拠は、終戦から80年が経過した今なお続く戦争であり、現在もウクライナへの軍事侵攻を続けるロシアを許すわけにはいきません。別日程で行われた平和行動の沖縄・広島・長崎とは異なる戦後80年を歩んできた北

方領土の方々は奪われた故郷に戻ることができない怒りと悔しさを抱えていました。その思いは私には計り知れません。

北方領土の早期返還は理想的ですが、現実には難しいことも承知しています。自国の領土を80年間も不法に占拠され続けたことに対する怒りの感情は、時間の経過とともに薄れていくものだと感じます。しかし、今私たちにできることは、この怒りの感情を忘れずに諦めずに持ち続けることです。そのためにも、多くの人に参加してもらい、風化させないための取り組みを続けることが重要だと思います。特に、根室での平和行動は、北方領土に本当の戦後が始まるために重要で大きな意義があると強く感じました。

現地に行かなければ感じることでできない貴重な経験ができたことに感謝いたします。





みんなで考えよう 「平和」のこと